

「冬の景色」

令和五年一月二日～三月一九日

季節ごとの情趣を表現する。大観はこれを明治の頃より試みていました。

たとえば《寒天》(下図版参照)という作品があります。描かれているのは、地面、小さな枝、数羽の水鳥のみ。あとはただ、薄暗く青ざめた、そしてかすかな光を帯びた色合いで満たされています。この地塗りには、キラキラと光る粉状の画材(雲母か)も散りばめられており、小さな氷晶が浮遊する空気の冷たさを表しています。

この作品は、冬の凍てつく寒さを色彩で表現していますが、一方、水墨でそれを表現したのが今回展示す

る作品群です。

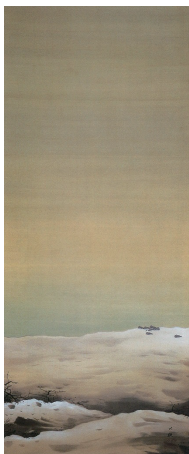
「墨に五彩あり」というように、水墨はあらゆる色を兼ねることができます。大観いわく、墨一色で描かれた花を見て、そこに赤や黄色の花、緑の葉、褐色の枝などを感じることができ(『日本美術の精神』「改造」昭和一四年六月)。

また、その外形が正しく写されておらずとも、春の感じなり涼味なり、哀愁なり瞑想なりを暗示する雰囲気をつ捉えていなくてはならないのである(『日本画と作家の精神』『藝術日本』昭和一一年八月)。

「風蕭々兮易水寒」からは、孤独やうら淋しさ、寂寥感。「神国日

本」からは凜とした厳肅さ。「冬」からは、冷たい空気を耐え忍ぶ雀の暖かみなど、水墨で描かれた冬の景色に、われわれは様々な心持を抱くことができます。

参考：「寒天」明治33年
茨城県近代美術館



「冬」

昭和八年頃 紙本

実の殻と花芽をつけた冬の桐が描かれる。枝にとまる二羽の雀は、寒さをしのぐように羽をふくらませて寄り添っている。渴筆(かすれ)による水墨表現からも、冬の厳しさを感じられる。大観邸の庭には桐の大木があり、日常的な光景から想を得た作品と思われる。



「風蕭々兮易水寒(かぜししょうしょうとしてえきすいさむし)」

昭和三〇年 絹本

「風蕭々として易水寒し。壮士ひとたび去つて復た還らず」(司馬遷『史記』)にちなむ。刺客・荊軻が秦王(後の始皇帝)暗殺に向かう際に詠んだ詩で、二度と戻らない壮士の覚悟が表されている。日本画の存続のために闘う大観の心情とも重なる。

「神国日本」

昭和一七年頃 紙本

昭和期、おもに戦中に大観が描いた富士図の好例。雪をいたたく山肌は墨と胡粉で、富士を取り巻く雲は金泥で描かれる。雲の上に聳える富士の姿はまさに唯一無二の孤高の存在。小品ながら、日本精神の象徴としての富士が力強く描かれている。

